

駄馬翻訳家の初夢



東江一紀

負けちゃいましたねえ、タイキシヤトル。この号が出るころには、すっかり古い話題になってきていることだろうけど、一九九八年後半の世相を象徴するようなレースでした。天皇賞でサイレンススズカがまさかの骨折↓予後不良（合掌）となり、エリザベス女王杯でエアグルーヴが負け、そういう流れが、

菅直人大こけスキャンダルあたりと連動して、どうにも人心の抛りどころがなくなっていた時期に、このフランス帰りのシャトル君だけは、悠々と横綱相撲を取って、それも並みの横綱ではなく、全盛期の北の湖みたいな憎らしいほどの強さで、マイル・チャンピオンシップを制してみせた。

だから、その四週間後のスプリングターズ・ステークスでの単勝一・一倍という人気には、不況、不倫、不浄、不信、不透明、不安定、と「不」だらけの年の瀬を迎えた日本国民のすがりつくような思いが込められていた、と解釈してしまうのは、牽強附会というものでしょうか。

でしょうね、はい。

ま、このレースのあとには、タイキシヤトルの引退式などというのが予定されていて、ファンのはお祝儀みたいに馬券を買ってしまい、馬や騎手や厩舎の側はちよつとだけ余分に力が入ってしまったのかもしれない。

結果は、果敢に勝負をしかけてきた若武者マイネルラブに競り負け、同期のグランプリ牝馬シーキングザパールにも抜かれての三着だったわけで、要するに、タイキシヤトルも人の子だったということだ。あ、馬の子か。

重賞七連勝、G I五勝という華々しい戦績に、最後でちよつぴりけちがついた格好だが、いいじゃないですか。セ・ラ・ヴィ、これも人生。あ、馬生か。

ともかくにも、五歳という働き盛りの年で引退して、タイキシヤトルはこれから繁殖生活に入るといふ。

これが、なんともうらやましい。だって、あなた、繁殖生活ですよ。

なんかこう、臆面もなく生々しい。それでいて、堂々としている。ビッグ・ビジネスとしての種付け三昧。

いや、いや、もちろん、お仕事なんだから、それなりのご苦労はおありになるかと存じますが……って、ついつい卑屈に構えてしまいつつも、わたし、種牡翻訳家などという職業を夢想するのである。

すなわち、現役の翻訳家としてある程度の実績を残すと、元気なうちに引退して、繁殖に入るわけですね。空気のいい田舎に引っ越して、適度な運動で体調維持に努めながら、朝から晩まで、精のつくものをひたすら摂取する。

お仕事の声がかかると、地元の（翻訳ファーム）別館・交配センターとかいうところに出向いてって、まあ、大物の種牡翻訳家ならスイートルームが用意されてるんでしょうが、わたしぐらいのランクだと、三階裏手の五番種付け室なんかに入れていかれて、本日のお相手と対面する。

お相手って言ったってねえ、自分で選べるわけじゃない。ちゃんとブリーダーがいて、例えば、フランスのG I級ミステリーの訳者を産出するためには、タイキシヤトル級の牡とシーキングザパール級の牝を交配させなくては、というようなことになる。

ハードボイルド血統の牡とSFプロパーの牝との配合で、サイバーパンク訳者をこしらえる、とか、ハイテク官能小説（どんな小説じゃい！）の人材が不足しているから、軍事スリラー訳者とエロチック・ロマンス訳者を掛け合わせる、とか……。

当然ながら、売れっ子の種牡翻訳家は引く手あまたで、あちこちの名牝とお手合わせし、次々に良血の産駒を出版界に送り出す。毎年暮れになると、『この種翻がすごい！』とかいうムックが出て、産出訳者数、訳書の総数、増刷率などのランキングが発表される。

リーディング・サイアーともなれば、翌年の種付け料は大幅アップ、講演の依頼も殺到して、充実一途の余生が保証されちゃう。そこへいくと、わたしなんぞ、元がよろず引き受けますの三流ユーティリティ・トランスレーターですからね。ブリーダーも相手選びに気合いが入らない。

五番種付け室で待っているのは、よそじゃお呼びがわからないような、訳あり、難あり、癖あり、疵あり、毒あり、運なし、品なし、徳なし、やる気なし、おまけに賞味期限切れの、なんと十拍子そろった駄牝ばかりです。こんなはずじゃなかったのに。って、泣きごとを言ってもしょうがない。自分で選んだ道じゃないか。かくなるうへは、並行輸入で

バイアグラを一トンほど……。

と、大幅な採算割れを起こしたところで、三流訳者は悪夢のような妄想から覚めるのである。いやあ、AV男優も楽じゃないっすね（なんのこっちゃ）。

そもそも、われわれの業界（AV業界じゃないよ）には、引退という概念がなじまない。なぜかとつらつら考うるに、ひとつはまあ、稼ぎが少なく、老後の保証もなく、辞めるに辞められないからだろう。

しかし、もっと大きな理由は、小説を翻訳するという行為自体に、老後の趣味を先取りしているような部分があるからではないか。少なくとも、わたしの場合、この仕事から撤退して、もっと楽しい趣味を見つけた自信がない。六十の手習いを三十で始めてしまつたようなものだ。

でも、敬愛する同業の名牝U田K子さんは、今手がけている本を訳し終えたら、引退するという。そのあとは、人を集めて酒宴三昧の生活を送るべく、最近、飲んで騒げる新居へ引っ越したそうだ。

うくん、そういうのもありかなあ。わたしやまだ、元が取れてませんからね。まあ、三十年は現役でやっていこうと、近くが見えにくくなった目を遠い未来に向けるきようこのごろではあった。